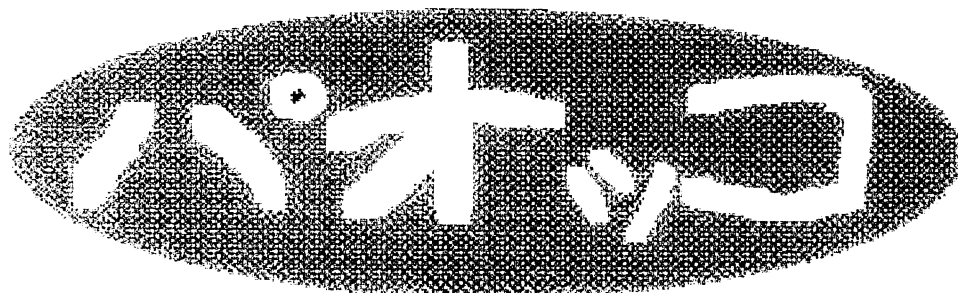


離れて暮らす親のケアを考える



## 「遠距離介護の実態調査」 報告書

2001年11月1日

2000年「エイボングループサポート」助成金(300,000円)を受けて遠距離介護の実態調査に着手することが出来ました。報告書完成に至り、エイボン女性文化センター(エイボン・プロダクツ株式会社)に心より感謝致しております。

# 「遠距離介護の実態調査」報告書

## 目 次

I	はじめに	1
II	調査実施の概要	2
III	調査結果	
	要約	3
	回答集計	9
IV	遠距離介護の傾向と分析	22
	1 帰省の頻度と片道に要する時間・費用の関係	
	2 男女別、年代別の帰省の目的	
	3 就業形態と帰省の頻度	
	4 帰省における楽しみ	
	5 帰省における疲労度と不安点	
	6 帰省するときに感じる配偶者への遠慮	
V	自由記述意見欄	34
VI	調査に携わったスタッフの声	43

## はじめに

日本では昔から老いた親と子が同居して、子が介護することが美德とされてきたようです。それは社会の仕組みが変化してきた現在も、変わりません。老親と遠く離れて暮らす子どもは、「親不孝者」と世間から非難されることも少なくなく、また、離れて暮らす子自身が、親と同居しないことに「うしろめたさ」を感じることもあります。

離れて暮らしてきた老親と「同居」を選択するためには、子ども世帯が故郷に「Uターン」する方法や、老親に子の暮らす家に来てもらう「呼び寄せ」という方法が考えられます。けれども、Uターンするためには、仕事や子どもの教育という問題がつきまといまいます。また、呼び寄せるには、老親に長年住み慣れた家を離れてもらわなければならない、親の多くは拒みます。

パオッコは、1996年の設立以来、年4回の会報発行と年1回の会合を中心として、会員からの投稿、意見交換、取材などを通じ、このような現状を見聞きしてきました。しかし、それぞれの家族事情が異なるため、なかなか遠距離介護の全体像を伺い知ることはできませんでした。

2000年よりスタートした介護保険により、介護という問題が社会的に注目されるようになりました。遠距離介護のこともマスコミなどを通じ世の中に報道されるようになってきました。そこで、パオッコでは、会員だけでなくより多くの人々に実態を尋ねることにより、遠距離介護の実態を探ってみることにしました。パオッコが誕生するまで「遠距離介護」という言葉自体存在しなかった世の中。支援するサービスなどはまだまだごく僅かです。実態を数字によって顕わすことが、行政や民間企業に、遠距離介護を支援する仕組みを考えていただくきっかけになれば幸いです。また、遠距離介護が特異なことではなく、ごく普通のことであること、そして、遠距離介護は、親を見捨てるものではないことを訴えたいと考えております。

本調査の実施にあたって、各マスコミを通じ、会員以外の方々にも広くご協力をいただきました。また、エイボン女性文化センターより女性のボランティアグループに助成金を贈る「エイボングループサポート」として30万円の助成金をいただくことができました。あわせて深く感謝いたします。

作業を進めるにあたっては、パオッコの有志10人ほどが何度も集まり1年半の月日を要しました。素人の集まりでしたので、統計のとり方などで、プロの手法とは異なる点や不適切な点もあるかもしれませんが、ご了承ください。たとえ、少しの不手際があったとしても、遠距離介護を机上の論理としてではなく、肌で感じているごく一般的な市民が集まり、設問作成からデータ入力、報告書作成までを手作業で行えたことは、意味のあることだと考えております。巻末に調査に関わったメンバーの声を載せておりますので、あわせてご覧ください。

2001年11月1日

離れて暮らす親のケアを考える会  
パオッコ代表 太田差恵子

# 調査実施の概要

## 1 調査の目的

65歳以上の高齢者で子どもと同居している人の割合は、年々下がっており、旧厚生省の調査によると半数を割り込むまでになっている。一方、増加しているのが老夫婦のみの世帯やひとり暮らし。

それにもかかわらず、「遠距離介護」の調査はこれまで実施されたことがない。そもそも、離れて暮らす親のケアを考える会パオッコ（1996年設立・事務局／東京杉並・会員数230人(全国)2001年10月現在）が誕生するまで、「遠距離介護」という言葉さえ存在しなかった。遠距離介護者に対して世間の風は冷たく、年老いた親と離れて暮らすことを非難されることが多い。

本調査は、遠距離介護を行う者の金銭的実情、社会的実情、夫婦間や親子間の実情、悩みや問題点を探ることを目的としている。

本調査を通し、もはや「遠距離介護」はごく一般的なことであることを実証し、また、行政や企業には「遠距離介護」を支援する策を実施することを提言したい。

## 2 調査の対象

実父母、義父母にかかわらず1人以上の親がおり、現在あるいは将来のその「老い」が気にかかり、かつ、その親の家（施設や病院に入所、入院中の場合は、それも含む）へ行くのに、片道2時間以上（玄関～玄関）かかるか、あるいは、片道の交通費が1000円以上かかる者。

## 3 調査の方法

調査は、希望する対象者に調査票を郵送。記入済の調査票は直接、離れて暮らす親のケアを考える会「パオッコ」に返送していただく方式で行った。回答は択一形式を主としているが、一部複数回答もある。上位順に2つを選択する場合は、1位が2ポイント、2位が1ポイントとしている。該当する項目をすべて選択する場合は、それぞれを1ポイントとしている。

## 4 調査の実施期間

2000年12月～2001年2月

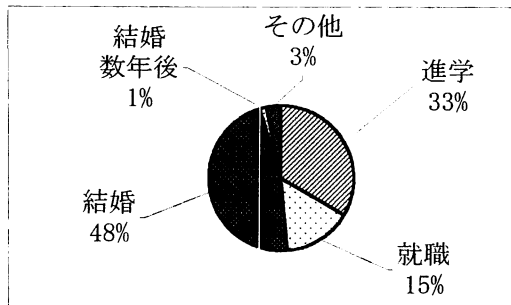
## 5 調査票の配付、回収状況

調査票は、パオッコの会員及びパオッコの会員の知人に配付した。さらに、朝日新聞、毎日新聞、中日新聞、神戸新聞などに「アンケート協力者募集」という記事が掲載され、応募者に配付した。NHKニュースでも報道された。調査票は803票配付し、有効回収調査票は564票、有効回収率は70.2%となった。当初は500票の配付を計画していたが、応募者が多く、急きょ300部を追加印刷した。それでも、調査票が足りず、数十人の方には、お送りすることができなかった。この応募者数、回収率からも、現在、あるいは将来、遠距離介護に直面する者の問題の深刻さや関心の高さが伺える。なお、有効回収調査票のうち、パオッコ会員のものは90票（16%）、会員以外が469票（84%）となっている。

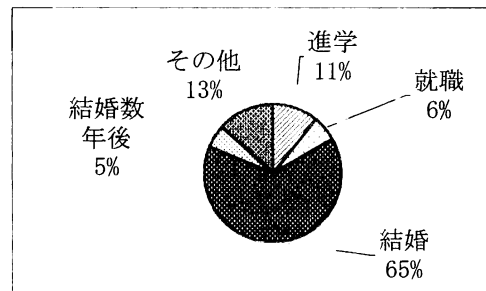
本調査では自由記述欄も設けており、多数の貴重な意見が寄せられた。代表的な意見については、後ページに掲載している。

今回の調査結果から「遠距離介護」の特質と思われるものを抜粋しました。  
 詳細については回答集計をご参照ください。(小数点以下は四捨五入しました。)

1. 親と別居したきっかけは多い順に1位・結婚、2位・進学、3位・就職。(問4より)

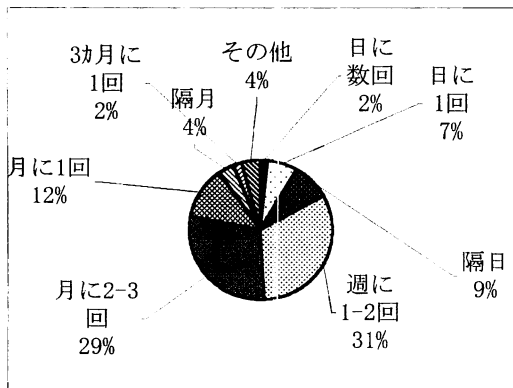


問4 別居のきっかけ(自分の親と)

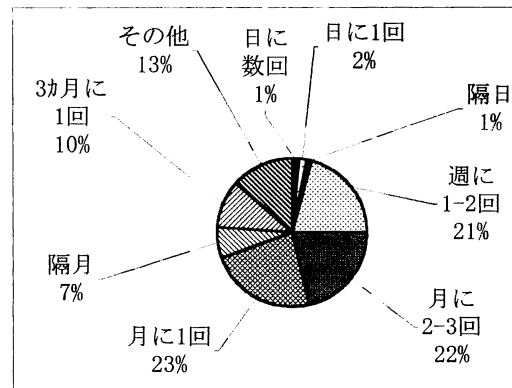


問4 別居のきっかけ(配偶者の親と)

2. 親と連絡をとる頻度は、自分の親の場合は週に1~2回が最も多く、配偶者の親の場合は月に1回、月に2~3回、週に1~2回がほぼ同数。(問9より)

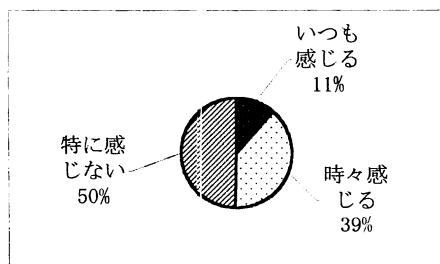


問9 連絡の頻度(自分の親と)

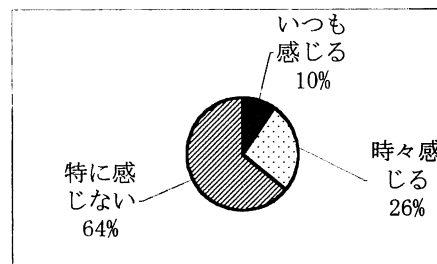


問9 連絡の頻度(配偶者の親と)

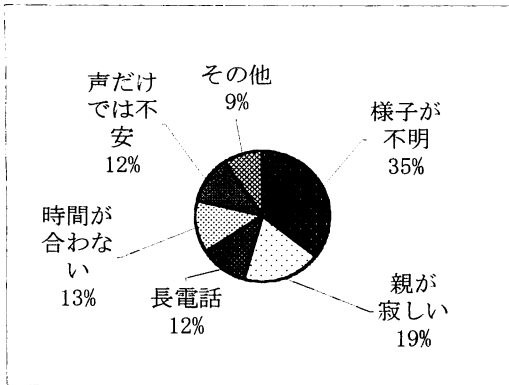
3. 自分の親との電話でのコミュニケーションでは、不都合を感じる者が半数。  
 理由は、親の様子が見えないから。(問13・問14より)



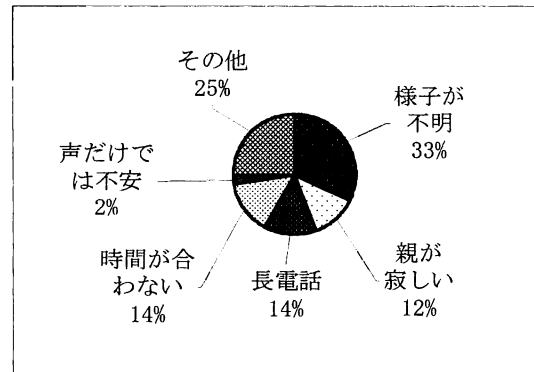
問13 電話の際不都合を感じる(自分の親と)



問13 電話の際不都合を感じる(配偶者の親と)

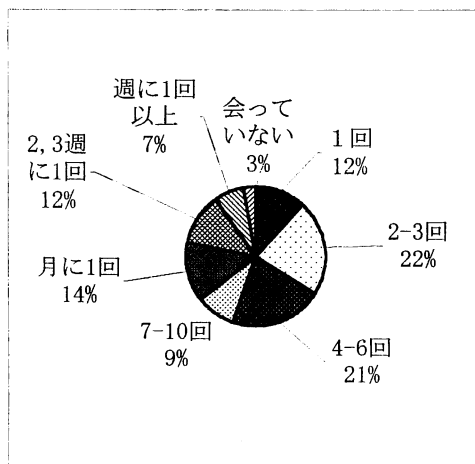


問 14 不都合を感じる理由 (自分の親)

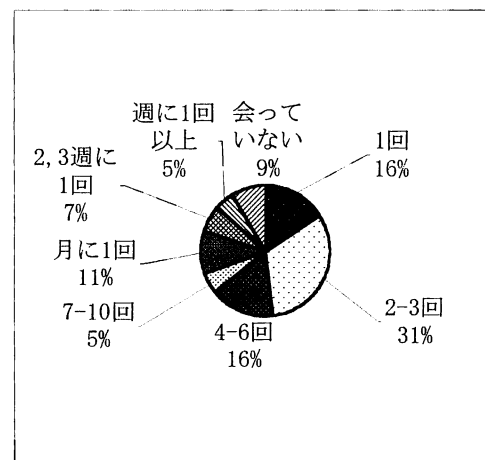


問 14 不都合を感じる理由 (配偶者の親)

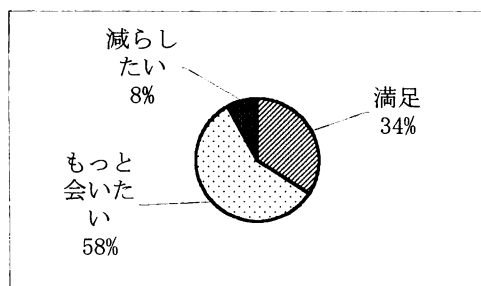
4. 最近1年で親と会った頻度は、自分の親、配偶者の親とも、2~3回がトップ。ただし、自分の親には「もっと会いたい」が半数以上。配偶者の親では「この回数で満足」が半数以上。(問 15-①、問 15-③より)



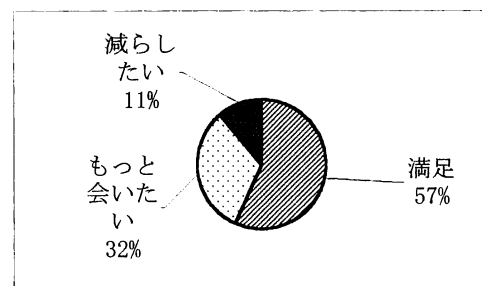
問 15-① 会った頻度 (自分の親と)



問 15-① 会った頻度 (配偶者の親と)



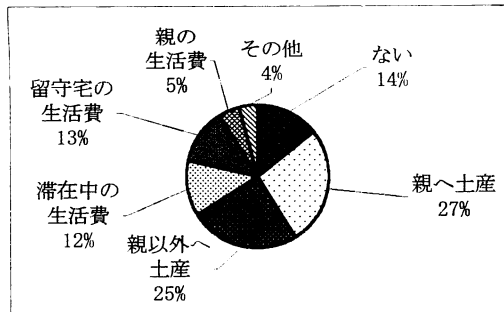
問 15-③ 会う回数の満足度 (自分の親と)



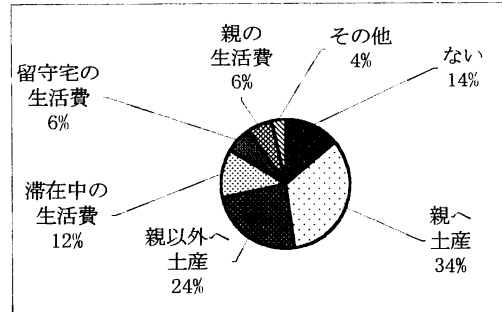
問 15-③ 会う回数の満足度 (配偶者の親と)

5. 帰省の際に、交通費以外にかかる費用は、親への土産代、親以外への土産代が多い。

(問 18-①より)

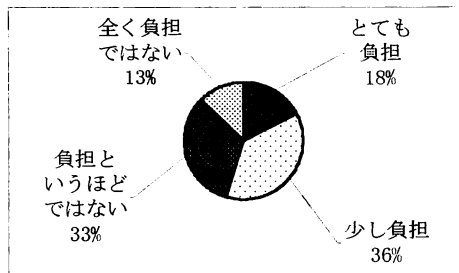


問 18-①帰省の際の交通費以外の費用(自分の親)

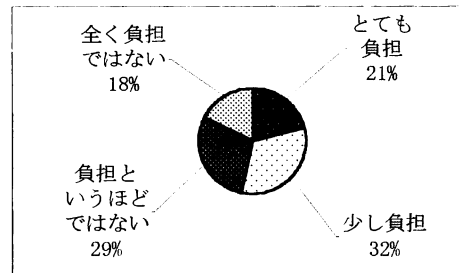


問 18-①帰省の際の交通費以外の費用(配偶者の親)

6. 親と交流するのに要する費用を「負担」と思う者が約半数。(問 21 より)



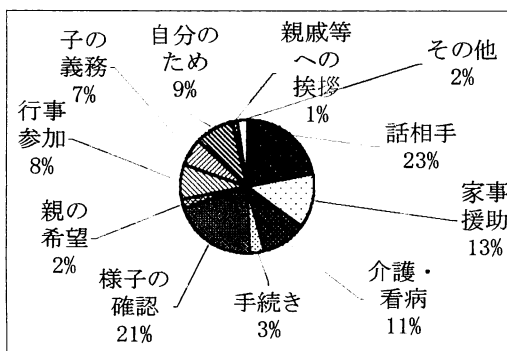
問 21 親との費用の負担感(自分の親)



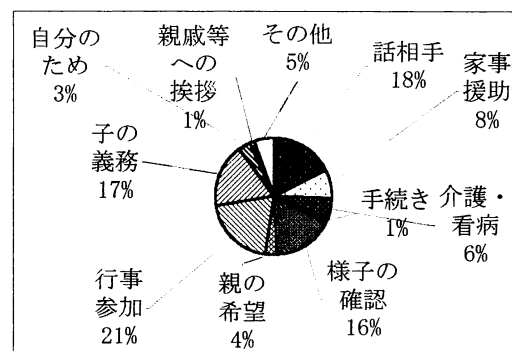
問 21 親との費用の負担感(配偶者の親)

7. 帰省する大きな目的は、自分の親の家へは「話相手になるため」がトップ。

配偶者の親の家へは、「行事参加のため」がトップ。(問 22 より)

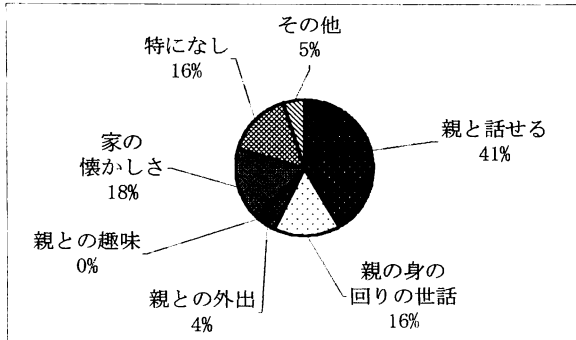


問 22 帰省の目的(自分の親)

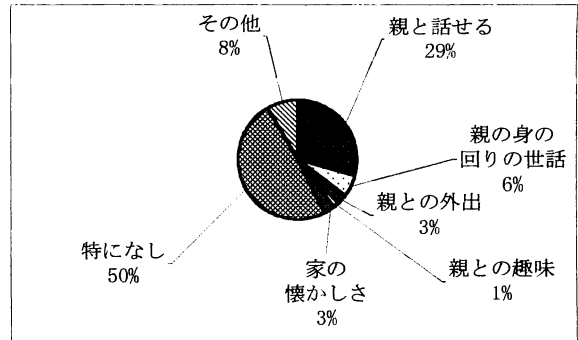


問 22 帰省の目的(配偶者の親)

8. 帰省の予定を入れたときに、一番楽しみに思うことは、自分の親の場合は「親と話せること」がトップ。配偶者の親の場合は「特になし」がトップ。(問 23-②より)



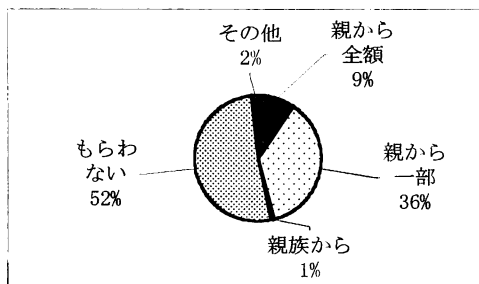
問 23-② 帰省の楽しみ (自分の親)



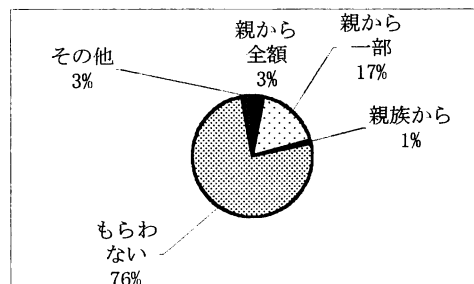
問 23-② 帰省の楽しみ (配偶者の親)

9. 自分の家へ帰省する場合、46%が帰省費用の全部または一部をもらう。

配偶者の家へ帰省する場合も 21%が帰省費用の全部または一部をもらう。(問 24 より)

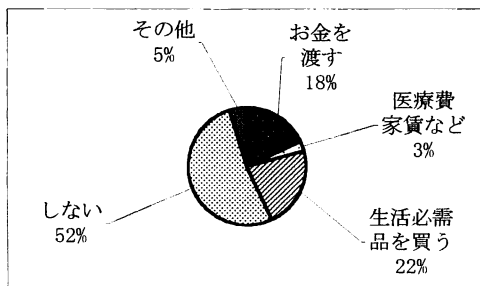


問 24 帰省の費用の援助 (自分の親から)

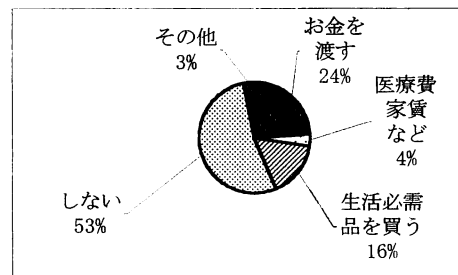


問 24 帰省の費用の援助 (配偶者の親から)

10. 親に対して、生活にかかる費用を負担することがあるのは約半数。(問 25 より)



問 25-① 親への経済的援助 (自分の親)

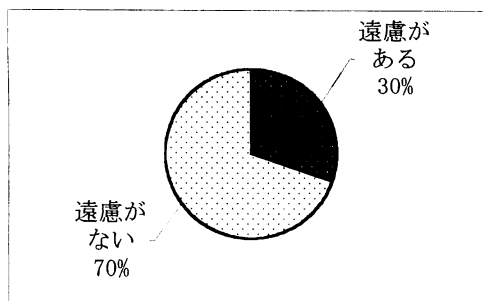


問 25-① 親への経済的援助 (配偶者の親)

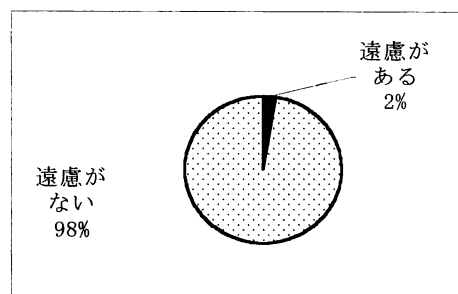


1 1. 自分の親の家へ帰省するために費用を使うことを、配偶者に対して遠慮する者は30%。

(問 29-①より)

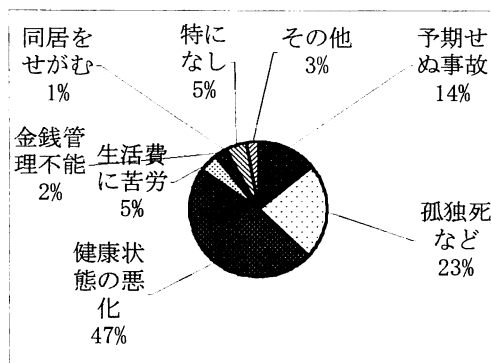


問 29-① 配偶者への遠慮(自分の親の為の費用)

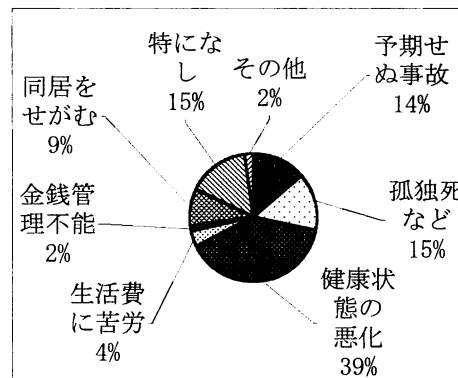


問 29-① 配偶者への遠慮(配偶者の親の為の費用)

1 2. 今後、親と離れて生活していくうえで、不安なことは「親の健康状態の悪化」「予期せぬ事故」や「孤独死」。(問 31 より)

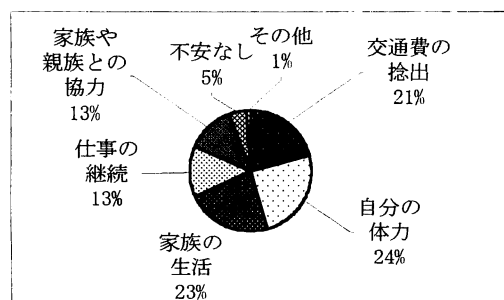


問 31 今後不安に思うこと(自分の親)

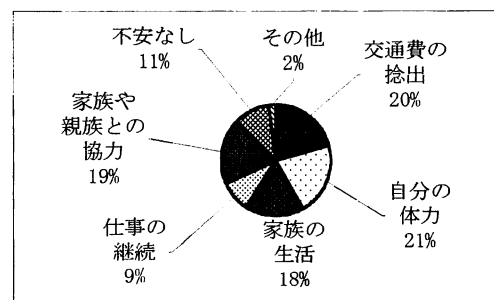


問 31 今後不安に思うこと(配偶者の親)

1 3. 今後、離れて暮らす親の家へ通ううえで不安なことは「自分の体力」「自分の家族の生活」「費用」など。(問 32 より)

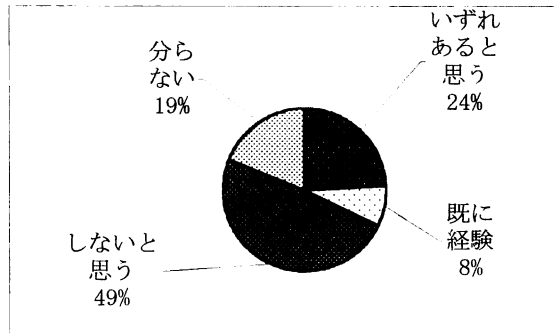


問 32 今後の不安(自分の親)



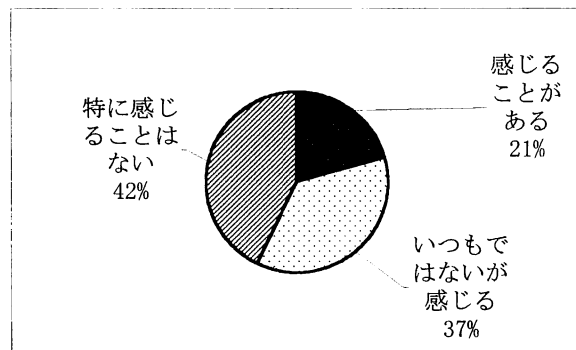
問 32 今後の不安(配偶者の親)

- 1 4. 離れて暮らす親の世話のために、仕事を転職あるいは退職することになると予想する者は24%、すでに経験した者は8%。「転職、退職はない」と言い切れる者は半数以下。  
(問 37 より)



問 37 離職・転職について

- 1 5. 帰省のために疲れを感じたとき、誰かのことを腹立たしく思う者は半数以上。  
(問 39 より)



問 39-④ 腹立たしく感じることもあるか